道場さんが刺激した和光大学

堂前雅史 *DAUMAE Masashi*

私と道場親信さんは、彼が和光大学赴任の時が初対面であった。その時、和光大学について「よその大学でキャンパス内を歩くと、前方に気づかずぶつかってくる者がいるものだが、この大学ではいないようだ」という感想を言われ、人間行動についての彼独特の観察眼が面白かった。

その後、2011 年 3.11 の大地震とそれに続く福島原発事故が生じた翌月の教授会の終了時、原発問題でシンポをやらないかというお誘いを受けたのが一緒に仕事をする始まりであった。学部学科を超えて、教員や学生が参集して立ち上げた一連のイベントは、演者から聴衆への講演ではなく、平等な議論の場にしようという趣旨でティーチインと名付けられた。原発問題は切り口が多岐にわたり、しかも刻一刻と事態が変遷していく状況の中で、議論の整理は大変だったが、道場さんがリードしながら、第 1 回「脱原発社会」(2011 年 5 月 19 日)、第 2 回「学問と未来」(2011 年 5 月 26 日)、第 3 回「職と労働」(2011 年 6 月 2 日)をテーマとして演者を配する形に落ちついた。お祭り気分で企画に参加していた私は、社会運動論の専門家によるイベントのきちんとした位置付け方と運営の見事さを見せられて勉強になった。

2012 年 4 月から、学部共通科目「インターンシップ」を二人で担当することになった。私たち現代人間学部のインターンシップは、研修先を企業ではなく NGO や NPO としているのが特徴である。道場さんは、学生が社会活動を通して大きく変身する授業の可能性にすぐに気づき、研修の意義、事前学習、事後学習などをきちんと位置付け直して、若者の可能性を引き出し、新たな息吹を与えてくれた。

2013 年に、まちだ NPO 法人連合会から和光大学との連携の打診を受けた私が、どうしてよいか分からなくて相談したのも道場さんだった。彼は共同研究を提案してくれて、学部学科を超えた教員と町田市民による楽しい共同研究プロジェクトが翌年度から始まり、結果として後の地域連携研究センターのスタートを後押しすることとなった。

2014 年度には同僚のロバート・リケットさんの定年を機に開催された「市民的不服従と

現代」（2015 年 1 月 16 日、2015 年 2 月 8 日）という連続シンポジウムの企画でも 2011 年と同じようにリーダーシップをとってくれたのも忘れられない。

2015 年度頃から、和光大学創立者・梅根悟の著作を熟読していた道場さんから、梅根理念を現代の大学改革に生かす「梅根悟ルネッサンス」構想を聞かされるようになった。目先のことにとらわれた大学改変が蔓延する中で、大学の社会的意義についての研究成果に裏打ちされた理念に基づいて時代に打って出ようという姿勢は、今時の大学改革のお手本になりうるものであったが、大学改組の道半ばで夭逝されたのは残念でならない。

道場さんは専門分野であった社会運動から大学教育まで広きにわたる視野と、それらを有機的に組み合わせる技量を持っていた。そこから私はいろいろ楽しく学ぶことができたが、若い人々は、日本社会の現状とその抱える問題をとても明快に語る彼の姿からもっともっと多くのものを得たのではないだろうか。そして彼は和光大学を場としていろいろな実験ができることを見せてくれた。これで終わらせるわけにはいかない。我々は道場親信が日本社会と和光大学に残した宿題を受け止めていかねばならない。

［どうまえ　まさし・和光大学現代人間学部身体環境共生学科教授］